

史學雜誌第貳編第六號

通編第百三十九號

明治三十四年六月十日

論說

國語上より觀察したる人種の初代

(四月廿日大會演說)

田口卯吉

満場の諸君、今日私に何か演説するやうにと云ふ御要求に接しましたは身に取り
て光榮の至りであります、私は此頃少し言語のことに付いて調べて居りますから、
「國語上より觀察したる人種の初代」と云ふ演題を差出して置きました、是に付きま
して私の考を述べる心得でございます、併ながら此問題は如何にも大なる問題で
ございまして、而して私は申上る迄もなく此言語に於きましては如何にも智識の
淺薄なるもので、色々調査を重ねて居りますが、まだ實に未熟なることであります
から、私が諸君の前に此意見を述べますのは、則ち諸君の教を乞ひたい考である

と御承知を願ひます。
先づ其大體の趣意を申しませうならば、今日ヨウロッパ並にアメリカの言語學者は、サンスクリットを研究した後に其サンスクリットの言葉が自らの使つて居る言葉と一つであると云ふことに氣が付きまして、自分共をアリヤン人種と名けて居る、是に對しましてホンガリー、トルコ、滿州、蒙古若くは日本、朝鮮等の人種をチュラニヤンと申して居る、今一つは彼の昔のヒプリューの言葉及びアラビヤ、エシプト邊に行れて居ります、言語を使つて居る人種をセミチツクと申して居る、大畧此三つに區別して居りますことは諸君の御承知の通りであります、是等の點は申しませぬでも御承知でもございませうが、アリヤンと云ふのはどう云ふ譯であるかと云ふと、彼のサンスクリットの中にあります吠陀と云ふ詩の中にサンスクリットを使つた人種が自分をアリヤと云つて居つたので、アリヤンと云ふ名稱が起りました、その以前はインド、ヨウロッパとかインド、ゼルマニツクとか云ふ名稱もございしましたが、今はアリヤン人種と云ふ名稱が流行つて居ります、さて又なにゆゑに吾々日本人、蒙古人、トルコ、ホンガリー、あたりをチュラニヤンと云ひますかと申しますに、ベルシヤ國は御承知の如くイランと申します、此イランの北に居る人種を、チュラ

ンと云ふ所からチュラニヤンと云ふ名稱を付けました、又ウラル、アルタイクと云ふ名稱も付けました、則ちウラル山とアルタイ山の間の語族と申すことであります、サユデヤ人、アラビヤ人、エシプト人をセミチツクと云ふのは、ノアの子の一人のセムの子孫と云ふので、セミチツクと云ひます、其言葉に依りますとエシプト邊りはハムの子孫だからハミチツクと云ひさうなものであります、言語を調べて見ると、ヒプリュー人と昔のエシプト人とは同じ様な言葉を使つたと云ふので、セミチツクの中に這入つて居る、そこでヨウロッパ人が始は彼の基督教のバイブルを信仰して、自分共の先祖はヒプリュー語を使つたものであらう、ユーフラテース河の近邊に起つたものであらうと、頻りに研究して見た所が、どうしてもヒプリュー語に於て自分に似寄つた言葉が出て來ない、ヒプリュー語の動詞の變化は今日のヨウロッパとは丸で違つて居ります、則ち左の如くであります。

殺

す

Qatal

彼男が殺せし

yiqtol

彼男が殺入或ハ殺サシ

Qatela

彼女が "

liqtol

彼女が " "

單 Qatalah

汝(男)が "

單 liqtol

汝(男)が " "

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

Qatalu		汝(女)ガ殺セシ	tiqtoliz	汝(女)ガ殺ス或ハ殺サン
Qataliz		私ガ	eqiol	私ガ
Qatolu		彼等ガ	yiqtoliz	彼等(男)ガ
Qetalem		汝等(男)ガ	tiqtolmolu	彼等(女)ガ
Qetalem		汝等(女)ガ	tiqtoliz	汝等(男)ガ
Qetalmu		我等ガ	tiqtolmolu	汝等(女)ガ
			tiqtol	我等ガ

ヒブリウ語に於ては大約子音は動かさないで母音が變化して働く言葉を使つて居りますから今日のヨウロッパ人が頻りに研究して見ても自分共の先祖と云ふ考が出て來なかつた然るにサンスクリットを研究しましてから其中の言葉がラテン、ギリシヤと同一であることを發見しました今日のヨウロッパの言語と云ふものは大概ラテン、ギリシヤが原語になつて居りますからヨウロッパ人がサンスクリットを研究した後に其言語の一なるに驚き己達の先祖はサンスクリットを使つた人種と兄弟であると云ふとを斷定しアリヤンと稱する事になりました然るに私は日本人はチラニヤンの語族の中に這入つて居りますゆゑに先頃よりトル

コ若くはホンガリーの言葉を頻りに研究して見まして而して之をサンスクリットと對照して見ますとトルコ、ハンガリーの語法と云ふものが却て其ラテン、サンスクリットに似て居ることを發見しました是に於てヨウロッパ人が自からアリヤン人種と云ふことに對して疑を抱きましたそれで其疑を今日諸君に申上げて疑を晴したいと思ひます譯してあげます。

サンスクリット	ギリシヤ	ラテン	ナルシヤ	トルコ	ハンガリー	ヒジブト	日本
アル	アル	アル	アル	アル	アル	アル	アル
現在單	現在單	現在單	現在單	現在單	現在單	現在單	現在單
as-ni	emni	s-nun	am	im	vagyak	ti	ware-ga aru
as-i	essi	es	i	sen	vagy	k	nanji-ga aru
as-ti	esti	est	ad	dur	van	f	kat-ga aru
複	複	複	複	複	複	複	複
s-nas	osmon	s-nus	un	iz	vagyunk	ten	ware-ga aru
s-tha	este	es-tha	id	siz	vagylok	telen	nanjin-ga aru
s-anti	osti	s-unt	and	dirtier	vannok	so	ware-ga aru
和ル	愛スル	愛スル	走ル	愛スル	マク	被ル	特ツ
現在單	現在單	現在單	現在單	現在單	現在單	現在單	現在單
botha-ni	philu	am-o	nas-am	severin	var-ok	ti-tuko	w uolsu
botha-si	phileis	amh-s	nas-i	severien	var-sz	ke-tuko	n uolsu
botha-ti	philei	amh-t	nas-id	sever	var	f-tuko	k uolsu
複	複	複	同義	複	複	複	複
botha-nus	philomen	amh-nus	nas-in	severiz	var-nuk	ten-tuko	wr uolsu
botha-tha	phileis	amh-tha	nas-id	severiz	var-tok	ke-tuko	nr uolsu
botho-ni	philousi	amh-ni	nas-id	severier	var-nuk	ke-tuko	kr uolsu

號六第編二十第誌雜學史

(六)

サンスクリット	ギリシヤ	ラテン	ペルシヤ	トルコ	ハンガリー	エジプト	日本
過去形 abodha-ni abodha-s abodha-t 同義 abodha-nu abodha-ta abodha-n	過去形 ephloun ephloun ephloun ephloun 同義 ephlounen ephloun ephloun	過去形 amibam amibam amibam amibam 同義 amibam amibam amibam	過去形 rusidam rusidam rusidam rusidam 同義 rusidam rusidam rusidam	過去形 severidam severidam severidam severidam 同義 severidam severidam severidam	過去形 var-ank var-ank var-ank var-ank 同義 var-ank var-ank var-ank	第一過去形 ni-tako ni-tako ni-tako ni-tako 同義 ni-tako ni-tako ni-tako	過去形 w mochi w mochi w mochi w mochi 同義 w mochi w mochi w mochi
1 過去形 bubodh-a bubodh-a bubodh-a 同義 bubodh-a bubodh-a bubodh-a	1 過去形 epheleke epheleke epheleke epheleke 同義 epheleke epheleke epheleke	1 過去形 amiveru amiveru amiveru amiveru 同義 amiveru amiveru amiveru	1 過去形 rusidam rusidam rusidam rusidam 同義 rusidam rusidam rusidam	1 過去形 severidam severidam severidam severidam 同義 severidam severidam severidam	1 過去形 var-ank var-ank var-ank var-ank 同義 var-ank var-ank var-ank	1 第一過去形 ni-tako ni-tako ni-tako ni-tako 同義 ni-tako ni-tako ni-tako	1 過去形 w mochi w mochi w mochi w mochi 同義 w mochi w mochi w mochi
2 過去形 bubodh-a bubodh-a bubodh-a 同義 bubodh-a bubodh-a bubodh-a	2 過去形 epheleke epheleke epheleke epheleke 同義 epheleke epheleke epheleke	2 過去形 amiveru amiveru amiveru amiveru 同義 amiveru amiveru amiveru	2 過去形 rusidam rusidam rusidam rusidam 同義 rusidam rusidam rusidam	2 過去形 severidam severidam severidam severidam 同義 severidam severidam severidam	2 過去形 var-ank var-ank var-ank var-ank 同義 var-ank var-ank var-ank	2 第一過去形 ni-tako ni-tako ni-tako ni-tako 同義 ni-tako ni-tako ni-tako	2 過去形 w mochi w mochi w mochi w mochi 同義 w mochi w mochi w mochi
3 過去形 bubodh-a bubodh-a bubodh-a 同義 bubodh-a bubodh-a bubodh-a	3 過去形 epheleke epheleke epheleke epheleke 同義 epheleke epheleke epheleke	3 過去形 amiveru amiveru amiveru amiveru 同義 amiveru amiveru amiveru	3 過去形 rusidam rusidam rusidam rusidam 同義 rusidam rusidam rusidam	3 過去形 severidam severidam severidam severidam 同義 severidam severidam severidam	3 過去形 var-ank var-ank var-ank var-ank 同義 var-ank var-ank var-ank	3 第一過去形 ni-tako ni-tako ni-tako ni-tako 同義 ni-tako ni-tako ni-tako	3 過去形 w mochi w mochi w mochi w mochi 同義 w mochi w mochi w mochi

之を見ましてもサンスクリットとギリシヤ、ラテンの動詞が似て居ると云ふことは直に分ります併ながらトルコの動詞の變化も實に似て居るハンガリーのも稍

號六第編二十第誌雜學史

(七)

似て居るとも分ります此言葉の特色と云ふものはどう云ふ所にあるかと云いますと動詞の後と一持つて参りまして一人稱二人稱三人稱の代名詞に着く之は日本人或は今日のヨウロッパ人の考から見ますと如何にも奇妙なる言い方でございますが詰りある我が「ある汝が」「ある彼の男が」と云ふ言ひ方である例へば知ると云ふ動詞に付きまして言ひましてもラテンでは「知る我が」「知る彼の男が」と云ふ言ひ方を使つて居るそれはサンスクリットもさう云ふ言ひ方を使ひます、ギリシヤも其云い方トルコと、ハンガリーとは今日でも其言ひ方を使つて居る昔のエンブトも稍似て居ります今日のヨウロッパ語でも動詞の語尾か人性に因りて變化しますが是は代名詞として遣つて居るのでない動詞の語尾として昔の形が意味なく遺つて居るのであります此ハンガリートルコは代名詞として今に之れを持つて居るのでございます之と同時に私が諸君に申し上げて見たいと思ひますのは名詞の格でございます日本で申しますと「テニチハ」と云ふやうなものであります今日のヨウロッパ諸國の國言葉と云ふものは皆眞に格と云ふものであります名詞の語尾に「テニチハ」の如きものかなくて唯々其の置き所に依つてそれが主格ともなり物主格ともなり物主格ともなる其名詞自身は少しも變化なく唯名

論 説

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六六三

詞の置き所に依つて格が違ふと云ふ譯でございすことは喋々を要せぬ併し日本に於きましては諸君の御承知の如く實は格と云ふものではない、我がと云ひますれば、がと云ふ言葉が既に主格の働を現はして居ります、コッパを持つと云ひますと、持つと云ふ動詞がなくとも、既にをと云ふ字が物格を示して居ります、斯う云ふ譯でございすから、コッパを我か持つと云ひましても、どう引繰り返しまして物主格と云ふものもあり、物格と云ふものもありまますのでございすから、ヨウロッパ諸國の今日使つて居ります言葉とは、尤て文法が違つて居ると云はなければならん、此日本の如き名詞を使つて居る國は他にあるかと調べて見ますと、先刻申上げました如くトルコ、ハンカリー等は皆矢張日本の「テニオハ」見たやうなものがあつた、又名詞の語尾も變化して居ります、語尾の變化と云ひますが私は後置詞と名を付けて宜からうと思ひます、ヨウロッパ諸國の語法では前置詞でありまされどもトルコ、ハンカリーは名詞の後に付くのでございすから後置詞と云ふので、後に置く言葉です、語尾若くは後置詞の變化で格の働きを言ひ顯はすのは先刻申した通りトルコ、ハンカリーは勿論サンスクリットにしてもギリシヤ、ラテンに於てもそれから今日ヨウロッパで疑問になつて居る、バスクと云ふ人種がある、こ

れはフランス、スバニスの間にあるピリニー山と云ふ山に居る人種であります、是等は語尾の變化若くは後置詞で名詞の格を現して居る、それですからラテンなどの語法でも名詞の置き所に構はない、コッパを子供が持つと云ふが如き言ひ方をして居ります、ギリシヤは稍、今日のヨウロッパに似掛つて居りますが、矢張名詞の語尾が變化して居ります、左の一表は之を證明するものであります。

ソ	オ	キリシヤ	ラテン	トルコ	ハンガリー	バスク	サント	日本
格	格	少年	星	大臣	書物	人	身体	醫師
hus	hus	neanias	stella	vizer	könyv	gizonok	ius	ekaki-ga
nas	nas	neanlou	stella	vizerim	könyvne	gizonen	ius-kyi	ekaki-no
ne	ne	neanli	stello	vizireh	könyvnek	gizoni	ius-la	ekaki-ni
nam	nam	neanton	stellam	viziry	könyvt	gizonika	ius	ekaki-wo
ne	ne	neanin	stella	vizirnan	gizonik	gizonik	ius-aii	ekaki-yori
ne	ne						ius-kyia	ekaki-niyorite
ne	ne						ius-na	ekaki-nioite

例へはサンスクリットで船と云ふ言葉はノーと申します、船はと云ふのはノースと云ひます、船のと云ふ時には「ノーウ」ス船にと云ふ時には「ノーウィ」と云ひます、こんな風に色々格がございすますが、日本で申しますと、船がとか船をととか、船のとか云ふ風で、所謂「テニオハ」を使つて居るのでございす、この語尾の變化と云ふものは

論 説

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六六四

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六六五

ラテン、ギリシヤ皆一ツである、此の如き語法を使つて居る人種は、此の如き語法を使はない人種より縁故の近い人種と見なければなりません、それと前置詞を置くか後置詞を置くかと云ふ事が一の大問題であります、先刻御話致しましたラテンとギリシヤは名詞の前に前置詞を置きますが、サンスクリットはどうかと云いますと後置詞で、三ツばかり前置詞がございますが、其他は凡て後置詞でございます、さうしますと矢張日本と同じく、書物をとかコツプをとか云ふ譯で、下の方に往く譯になつて居ります、今日ヨウロツパのは段々上の方へ往くのでございますが、日本のは皆下の方に往く、秋の田のかりほのいほのと云ふ風に下に往きますが、之をヨウロツパで云いますと、逆に言はなければなりません、サンスクリットも下へ往く言葉の使ひ方であり、さうして見ますと私が茲で所謂文法から觀察致しますとサンスクリット、ラテンとカンガリートルコ、日本、蒙古、満洲の方は稍、近くなる、而してギリシヤはサンスクリット近邊でございますが、今日のヨウロツパ諸國の言語と云ふものは九て縁が遠いものであらうかと思ひます、其點に付きまして茲に其文法の大要を示します。

サンスクリット

Ganakah	satvarum	sviyam	nagarum	ragama.
ガナカハ	急キテ	彼ノ	市ニ	往キシ
putrena	saba	pita	gotah.	Max Muller
子供ト	共ニ	父ハ	在キシ	曰ク印度ノ語法ハ主格、物格、動詞ナリト

ラテ

Brutus	amicum	suum	occidit.
ブルタスハ	友人ヲ	彼ノ	殺セシ
Caesar	uxorem	suum	repudivit.
セーサルハ	妻ヲ	彼ノ	追出セシ
liber	quem	legis.	
書物	其レヲ...所ノ	汝カ讀ミシ	

ギリシ

Thebaious	chromata	atēon.	
セーナス人ニ	貨幣ヲ	彼等ハ求メタリ	
Ho	Kyros	ton	Göbryan
カイルスハ		ゴブヤナスヲ	命シタ

トルコ

Yalan	arsslandan	diri	tili	yek	dir.	
死シタル	獅子ヨリ	生キタル	狐カ	善ク	ナル	
Faklere	veren	alibin	vorit.			
貧キ人ニ	與ヘルハ	前ニ	與ヘル			
Gueukler	deh	olan	İbhaniz,	ianin	mookenless	olsoun.
天ニ		ヤスス	我等ノ父ヨ	御名ヲ	ツカメサセ	タマヘ
Gueukleh	munrudun	nidjeh	isch	yordah	dakui	lenjleh,
汝カナル	如ク	アラセ玉ヘ	地ニセ	同シク	左様ニ	
						Hehr
						günunkih
						elmekimiy
						我等ノ袍包ヲ

國語

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六六六

(一一)

bizeh	我等ニ	boo	此ノ	gufun	日モ	vit	與ヘ玉ヘ	vo	而シテ	sootcharinizy	我等ノ頭ヲ	baglishuh	許ス如ク	bizeh	我等ニ	sootchy-ohnlareh.	罪人ニ
Hem	ソ一シテ	ighanyah	試ニ	salma,	遇ハセス	ila	却テ	klubiscen	惡ヨリ	coortar.	拯ヒ玉ヘ	Tehun	ソハ	mekk,	國	koowah,	力
ebbed	永ク	sonun	汝ノテ	dit,	アハ	Amin.											issot

Janos
szereci,
愛ス
Janos
Marit
愛ス
szereci,
愛ス

コ
ス

Atia	神ニ	unsar	我等ノ	thu	汝ノ	in	於ケル	hinunam	天ニ	wehnai	神聖ニサレテアル	nano	御名ガ	thein,	汝ノ	Gimai	來テモ賜ヘ
thindinassus	御國ヲ	theins.	汝ノ	Waitthai	アラモ賜ヘ	wilja	御心	theins	汝ノ	swe	左様ニ	in	於テ	inh	又	ana	於テモ
Hlaif	麵包	unsaruna	我等ノ	thana	糧キテ	sintleinan	與ヘヨ	gif	我等ニ	uns	今	hinunam	日モ	dagca.	而シテ	jah	又
thantei	所ノモノヲ	skrlaus	食フテ	sijanun,	我等ハ有ル	swaswo	如ク左様ニ	juh	又	weis	吾々ガ	afetam	ユルスガ	thaim	其レ等ノ	skrlam	罪ヲ負ヘル者ヲ
Jah	而シテ	ni	持チ來リ	briggsais	我等ヲ	uns	在	in	試ニ	fransuhajni,	却テ	ak	我等ニ	lousais	救ヘ	uns	我等ノ
																at	thannam
																	nblin.

Hilez	死ニ就ケテ	unsa	疊ク	orbit	記憶	aci	セヨ	ilberrian	寺ニ	sortzian;	入ル時ニ	hi	汝ノ	nolako	如ク	zitradeia	彼等ハアリシ
ziren	彼等ガテ	arian;	時ニ	hek	彼等ノ	bezala	如ク	hil	死ナ	bebur	チマ	dak	汝ハナラヌ	eta	而シテ	ez	知ラ
																	jakin
																	ordian.

Ohoy egik jeinkonri deyen barkhamenduya.
新ヤ ナセ 神ニ 彼カ汝ニ持ッ 許

寺ニ入ル時ニ彼ガ生キアリシ時汝ノ如クアリシコトヲ善ク思ヘ、汝ハ彼ノ如ク死ナチナラヌ、而シテ瞬間ヲ知ラヌ、
神ニ祈レ、彼カ汝ヲ許サントトナ

セ
ル
一

Ki	如何トナレ	kakah	斯ク迄	ahab	愛セシ	hi' elohim	神ハ	'eth-ha' olim	世ヲ	'adh-ash'er	彼ガ與ヘシ	nathän	'eth-benö	(其)子
'eth-yehiahö	其國	lenü'än	様ニ	jö' — yöhäh lu	無ク	kol — hämmü' amia	凡テノ	kol — hämmü' amia	信スル人々	löö	彼ヲ	kä	'im — Yigeb	却テ
läyyé	生命ヲ	'ölanm.	限リナキ											

ベ
ル
シ
ヤ

Mard-in
人ニ
Kitab
書物ヲ
be
人
ward
與ヘル我

Kitab-in
書物ヲ
be
人
ward
與ヘル我

バーマ氏曰ク、ベルシヤノ語法ハ主格物体格動詞ナリ、又曰ク名詞ハ外ニ語尾ノ變化ナシ其他ハ前記詞ヲ置キテ意味ヲ顯ハス

子
ベ
ッ
ト

Kyo
汝ハ
fu-na
トヨカラ
yon
來レルカ。
na-lu
我ニ
da-run
ヨリ多クノ
wo-ma
乳ヲ
eig.
與ヘヨ

臺灣語彙

第十二圖六十六

(一一)

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六六九

此等の文章を一讀しますときは、サンスクリットなり、チベツトなり、ラテンなり、トルコ、ホンガリー、バスクなり、皆日本に縁故の深い人種と云ふことか分ります、主格、物格、動詞の置き所がよく日本に似て居ります、少々は相違して居る所もありますが、大體日本に近いものにて、支那ヨウロッパと違つて居ると申して宜うござりませう、而して最も違つて居るのはヒブリウとゴスであります、ゴスは御承知の通りローマの衰へし時に當り、^{ハンガリー}匈奴に追はれて^{ハンガリー}匈奴の先驅となつてヨウロッパに入つてダニユーフ河の近方からローマ帝國に攻め込んでイタリー、並にスバニスへ這入つて、其國言葉も滅し、人種も絶えて仕舞つた人種である、其時に彼のゼルマン人種がローマの北に興つてフランス其他を蹂躪したのでございしますが、其ゴスの國言葉が今日僅に一二文遺つて居りますのを其一をこゝに譯してございます、此ゴスの使つた言葉はどうかと云いますと、今日のゼルマン人種の使つて居る文法と同じでございます、さうしますと、私共が推測します所に依れば、元とローマ人はサンスクリットと同じ人種であるが、此ゴスなりゼルマン人種なりは丸で違つた文法を使つて居る人種であります、其れがローマ帝國を破壊して今日のヨウロッパの國言葉を起したのであります、さうして見ますと今ヨウロッパの言語學者

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六七〇

が自分をアリヤン人種と云つて居りますが、何れ結局はアリヤンであつたらうが、餘程縁が遠きものと思ひます、ヨウロッパの今日の言葉はサンスクリットやラテンの言葉が餘計這入つて居るから、同じ人種と云ふことを云ふのは無理であると思ひます、例へば言語學者の方ではクリムの法則と云つて、サンスクリットでビと云ふのはラテンに來てバになるとかイギリスに來てフになるとか云ふ法則が極めてあります、是は文法には縁がないのであります、私共か今日演説する言葉は多く支那語を用ひます、僕が諸君の前に演説すると申す文中に僕と云ふ言葉も、諸君と云ふ言葉も、演説と云ふ動詞も皆支那語でございませうが、然らば日本の文法は支那かと云いますと、日本の文法は丸で違つて居ります、之と全く今日のヨウロッパ諸國に成程サンスクリットか澤山出ますか、其はサンスクリットと同一語族たるローマ人が一時歐洲諸國を統一して總ての文明をこれに輸入しましたからであります、併ながら其使つて居る文法はどうかと云ふと、丸で逆になつて居る、其れは言語は輸入する事か出來ても文法は改めるとは六ヶしき故であります、然り而して唯今申しました通り、ゴスやゼルマン人種がラテンを破壊し、根本的に文法を變しましたラテン人種とゼルマン人種の勢力の多少は現今のヨウロッパの言

(六一)

語を調査すれば分りやす。

イタリー	スベニス	フランス	セルマン	スウェデン	ロシア	日本
1 la stella della stella alla stella dalla stella	1 la madre de la madre a la madre la mère	1 la mère de la mère a la mère la mère	1 der bruder des bruder den bruders den bruder	1 blomman blommans blomman blomman	1 voinn voinn voinn voinn	1 hoshi-ga hoshi-no hoshi-mi hoshi-wo hoshi-yori hoshi-nite hoshi-nite
2 tu hai	2 he	2 tu as	2 ich habe	2 jag älskar	2 ya postochahl	2 warega motshi
3 egli ha	3 has	3 il a	3 du hast	3 du älskar	3 ya postochahl	3 warega motshi
4 ella ha	4 ha	4 elle a	4 sie hat	4 han älskar	4 on stochahlit	4 warega motshi
1 io aveva	1 habia	1 j'avais	1 ich hatte	1 jag älskade	1 ya postochahl	1 warega motshi
1 io ebbi	1 habia	1 j'avis	1 ich habe	1 jag älskade	1 ya postochahl	1 warega motshi
1 io avio	1 habia	1 j'aurai	1 ich werde haben	1 jag skal ha	1 ya postochahl	1 warega motshi
1 io avito	1 habia	1 j'ai eu	1 ich hatte	1 jag hade	1 ya postochahl	1 warega motshi
1 io aveva avuto	1 habia habido	1 j'avais eu	1 ich hatte gehabt	1 jag hade älskat	1 ya postochahl	1 warega motshi
1 io ebbi avuto	1 habia habido	1 j'eus eu	1 ich hatte gehabt	1 jag hade älskat	1 ya postochahl	1 warega motshi
1 io avio avuto	1 habia habido	1 j'auris	1 ich werde gehabt	1 jag skal ha älskat	1 ya postochahl	1 warega motshi

號六第編二十第誌雜學史

(七一)

此表にある如く今日のヨウロッパに於ては種々の格はロシア語の外は大概位置で意味を現して居る、同じ言葉を使つてさうして其位置で意味を現して居る、而して其他には重に冠詞と前置詞が結付いて種々の格を言顯はします、ラテンの言葉が多くありますなれども、物主格の場合の外は凡て名詞に變化なしと申して宜しからうと思ひます、是が今日のヨウロッパの文法であります、而して動詞の方に参りまして、先刻申しました通りラテン、ギリシヤ語の後を受けて居りますから、動詞の語尾や助動詞の語尾などは變化するとが遺つて居る、現にスベニスは一人性二人性三人性に代名詞を用ひずして動詞の語尾で言顯はして居る、イタリーは代名詞を用ひますか、動詞の語尾が變化して居ります、フランスに参りますと少く變化しますが、セルマンは其變化が大に少くなります、此等を見ましてもラテン人種とチュートニック人種の混合の程度が分ります、イタリー、スベニスはラテン人種の勢力の多き所であり、セルマン、イギリス、スウェーデンはチュートニック人種の勢力の多き所であり、其勢力の多少か今日ヨウロッパ諸國の言語の相違に大原因を爲すものであると信します、而して更に一步を進めて論すればラテンなりギリシヤなりサンスクリットなりは、日本と同じやうに助動詞を動詞の後に附

くる事であり、我が持つてあらうと云ふ様にあらうと云ふ助動詞が動詞の下に附くのが、日本の語法であります。ラテンなどは語尾が皆變化して參ります。サンスクリットなりギリシヤは過去になりますと頭に^とと云ふ字が附き、大過去に於ては其頭語を重複しますが、其働きは語尾の變化にあると信します。ラテンは日本と同じ語尾の變化のみであります。然るに今日のヨウロッパの文法は大概助動詞が動詞の上に附きます。我が持つてあらうと云ふを ^{アイヤハ} I shall have 持つたてあらうと云ふのは ^{アイヤハ} I shall have had と云ふ工合で、上に伸ひて往く、幾らかまだ ^と と云ふ ^{イン} ing と云つて、語尾の變化は幾らか遺つて居りますけれども、語尾の變化に大なる意味が存するのでなくて上に用ふる助動詞が斯う伸びて往くのが意味を現すのでござい、さうして見ると、日本で持つてあらうとか持つたてあらうとか持つたりしとか云ふ如く、助動詞が下の方に延ひて變化して働を示すのとは文法が全く違つて居る。されは私はサンスクリットなりラテンなりギリシヤなりを先祖といひたしませば、^{ハンガリー} ハンガリー、^{チベット} チベット、^{トルコ} トルコ、^{日本} 日本、^{朝鮮} 朝鮮、^{蒙古} 蒙古の方が稍、近いかと思ひます。先祖を尋て見ると、吾々の方がアリアン人種の本家筋になりて居りはしないかと思ひます。然らばヨウロッパのローマ帝國を破壊した人種即ちゼルマン人種とか、

唯今云ふゴスとか云ふ人種はどうしてサンスクリットから別れたらうかと云ふに孰れサンスクリットなどを使つた人種が世界の先祖に違ひないが、必ず直接でないといふことは斷言すると思ひます。サンスクリットを使つた人種の近所にヨウロッパ流の文法を使つた人種が昔からあつたかどうかと云ふことを調べるのが必要であらう。そこで私は此處に一表を御目に懸けます。

フリニカの年表に依りラベルトン沿革地誌の年表を參照す、
支那の事實は綱鑑易知錄に依り推算す、
インド釋迦の生寂は釋氏稽古畧に依り推算す、

世紀	日本	支那	インド	ペルシヤ	バビロン	ジュデア	フエニシヤ	エジプト	ギリシヤ	ローマ
第四〇										
第三九										
第三八										
第三七										
第三六										
第三五										

論說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六七五

[illegible]

此の表は耶蘇紀元を根據として、何れの人種か古い人種であるかと云ふとを探つて見ました表であります、此表に據れば歴史の古いのは支那であります、支那ほと

論說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六七六

[illegible]

明な歴史を有して居る人種は此世界にないやうに思ひます、バイブルなどは古いと申しませけれども、モーゼが書いたと云ふことでございますから、紀元前千四百九十一年以後であります、併ながら支那に於ては之は重野博士等の御意見を伺はなければなりませぬが、彼の支那の歴史の書物の中で最も古いのは書經かと思ひます、書經には堯典とか舜典とか禹貢などと云ふものがありますか、之は何時頃書きましたか存じませぬが、孰れ夏の代の初あたりに書いたとしますれば、紀元前二千二百年からの昔の頃に書いた歴史であります、之が今日まで遺つて居るのは他に類なからうと思ひます、而して歴史としまして、伏羲氏以後は稍分つたものと見て宜からうと思ふのであります、殊に黃帝以後は立派なものであります、去ればユデアなとより餘程古い所が明になつて居ります、而してエジプトは古いと申しませけれども、色々ピラミッドやスフィンクシなどがありますけれども、その年代は支那程明なものだとは私共には信用出来ません、エジプトの歴史は想像で斯う云ふ年代を附けたのであります、支那のは明に凡そ此位な時代であらうと思へる、何故と云ふのに其後に現れた堯舜禹其他の人物がチャンと連續して、普通の人間らしく世の中に出て居ります、想像して古くしたのとは意味が違ひますから古い

に相違ない、そうして見ますと支那の文明と云ふものは餘程古いことが知れます、之と比較しますと、インドと云ふものは歴史として新しくあります、成程ヨウロッパ人がサンスクリットを讀みましてから、頻りにそれに惚れたか知りませぬが、釋迦の時代か紀元前一千一年頃のものでありますから、支那の禹から見ると千年も後のものでございます、さうすると吠陀などと云ふ詩の作られた時代は、何時頃か分りませんが、兎に角にサンスクリット風の語法を遣つた人種を以て世界の祖先と見ますときは、支那人種の分れたのもセルマン人種の分れたのも、何れ伏羲氏より以前數千万年の事でありましょう、此時代に於てサンスクリットは支那風及びセルマン風の文法に進化したものと見做さねはなりません、支那の言語は外國人より見ますれば如何にも奇異なる言語であります、其の文法を調べて見ますれば、全く今日のヨウロッパの文法と同一であります、私は其の最も古い禹貢に就いて此の文の組織を研究して見ませう、禹敷土、隨山刊木、奠高山大川、是たけの文章に就いて、日本ならば禹はとか土をとか云ふ、テニヲハを付けべき所を、支那では如何なる所に持つて參りても其の字切りで、而して禹のと云ふ場合に限り之と云ふ字を語尾に付するは、イギリスの物主格のSと同一であります、又禹が土を敷ちと云

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六七九

ふ敷の字を日本語で云ひすすとワカチとかワカツとかワカチシとか語尾に種々の變化かございますが、支那では敷と云つた切りで、過去も現在も未來もありません、故にヨウロッパの言語學者は單熟音モンシレヒツとか孤立アイソレーティングとか申して賤しみますが「將に……せん」と云ふときは、將と云ふ助動詞を動詞の上に置き、未來には當可應須等の助動詞を用ひます、之はイギリスなどに未來の助動詞が多くあるものと同一であります、又た支那は單熟音の國語なるか爲に、ヨウロッパとは全く違つて居る様に論しますが、サンスクリットも單熟音であります、而して其根語はよく似て居ります、譬へはサンスクリットで父を *pitr*、母を *matr* と申しますが、其の根語は *pit* と *mat* と申すのであります、則ち支那の父母と同一であります、此の様な事を調べますと、實に多いことと存します、唯々支那は漢字の如きものを造りて字と字との連合が出来ぬ様になりました故に、今日まで單熟音で居りますか、若し日本流に「母シヤ人」「父シヤ人」と云ふか如き語尾を付けることか出来れば、連合語にも屈曲語にもなりて、*father* とか *mother* とか云ふ様になります、去れは私は文法上より觀察すればヨウロッパ諸國はサンスクリットよりは支那に近いものと論せねばなりません。

ヘルシヤは動詞の變化はサンスクリット日本等と同一であります、名詞の格を言ひ顯はすのに、其の位置と前置詞とを用ひて毫も語尾の變化を爲さぬ點と十分なる未來に於て助動詞を動詞の上に置く點は、支那及びヨウロッパ諸國と同一であります、而してロシアは名詞の格も語尾の變化を以てし、動詞の時も多く語尾の變化を以てする點は、日本風にて、其の未來に至り助動詞を動詞の上に置く點はヨウロッパ風であることを認めず、去れはサンスクリットよりチュートニツクの文法にまで進化するには、其の間に必ず支那ヘルシヤ、ロシア等が進化の一階級であらうと信します。

以上の如く觀察いたしますときは、私は昔カウカサス山の北に居つたスキテン人種、別ちシシヤン人若くはヘルシヤの北に居つたチュラニヤン人種は、今日のトルコ、ホンガリーの如き語法を用ひたる人種にあらずして、却てロシア若くはゼルマン風の語法を用ひたる人種でありはしないかと思ひます、トルコ、ホンガリーは元來中央アジア、若くは東方アジアに居りし人種にて、カウカサス山の北に居つたものはロシア若くはゼルマン人種の祖先であらうと思ひます、果して然らば今日のヨウロッパ人こそチュラニヤン人種であります、然るに今や自らアリヤン人種と

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六八〇

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六八一

稱して、我々をチユラニヤンと稱するは、我々の先祖を横取りして、我々を末家筋に貶すものではありますまいかと存します。

文法上より觀察するときは、私は最初の國民は必ずトルコの如く、名詞動詞ともに語尾の變化を以て意味を顯はし、動詞の語尾に一人性二人性三人性を付ける語法を用ひたものであらうと思ひます。

其れが名詞に於てはサンスクリットとなりて、二三の前置詞を用ひ、ラテンギリシヤを経て前置詞を益々多く用ひ、終にベルシヤ支那の如く前置詞を以て凡ての意味を顯はし、語尾の變化を不必要として終に今日のヨウロッパの名詞の如く全く語尾の變化なき様となり、動詞に於てはラテンは原形を存し、サンスクリット、ギリシヤの如く過去に於て頭語を付し、大過去に於て重語を付するとなり終にベルシヤ、ロシヤの如く未來に助動詞を動詞の上に付するとなり、今日のヨウロッパの動詞の上に數多の助動詞を置きて時を言顯はすこととなりしならんと推測いたします。元來「テニチハ」がありますから、動詞を物牀格の上に置いても意味は通するので、ラテン、ハンガリーの如きは日本の如く如何に其の位置を變更しても宜いのであります。其れ故に初めはベルシヤとなり、ギリシヤとなり終に支那ヨウロッパ

の如く常に動詞を物牀格の上に置く語法となりしことと信します。

元來トルコ人ハンガリー人は中央アシヤに於てサンスクリットを用ひたるアリヤン人チベット人等と同居して居りしものであります。其れ故に其語法か斯くの如く似て居るのであります。ラテン、ギリシヤも何れの時代如何なる地方より移住したか知れませんが何れアシヤの中央から出たものに相違ありません而してゼルマン人種もいつれ此の一族中より別れたものに相違ありませんが、別家の別家にて、早くよりアシヤの北よりヨウロッパの北部に移住して久き歳月を経ました故に、此の如き文法の相違を生じた事と存します。而して其國語中に多くサンスクリットと同一なる言語を存する所以は、是れは別の原因があることにて、中古ローマの文明に感して多く其の言語を輸入したる爲めであります。故に之を證據となして自らアリヤンと稱するは決して正當なる議論ではありませんと思ひます。

日本の語法は全くトルコと同一であります。唯だ動詞の後に代名詞の付かぬ點が相違して居るのみであります。神代の尊達の歌を見ましても、動詞の後に代名詞の付いて居ることはありませんゆゑに、歴史以前に於て是は消え失せたことと信し

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六八二

論 說

國語上より觀察したる人種の初代

第十二編六八三

ます、朝鮮にも此の如き語法はありませぬゆゑに、其れより先にて消え失せたことでありましやう、しかしトルコ、サンスクリット風の文法は日本の文法中に無疵に存在して居りますから、我々はヨウロツパ人に比すれば本家筋に近いと申して宜しからうと存します。

言語を以て人種の初代を研究することは極めて廣大なる問題にて、逆も一朝一夕に決し得べきことでありませんが、私は一朝一夕に決し得ぬとの理由にて黙々に付し去るよりは、研究の中途にても之を發表して、種々の學者の研究を之に集めることか緊要であると信しまして、諸君の清聽を汚しました次第であります、以上諸國の中サンスクリット、ロシヤ、ヒブリウ、ギリシヤ、エジプト等は假名文字も違つて居りますので之をローマ字に改めましたが定めし發音の誤謬があるであらうと存します、然し是れまでに調査するに就いては、随分勉強したのでありますから、少々の誤謬に對しては手嚴き攻撃を加へられぬ様に願ひます。(拍手大喝采)

此篇の材料蒐集に關して淺田榮次君、上田敏君和田鼎君其他數氏の贊助を得たるを謝す

田 口 卯 吉 附 記